無名野草

島津忠夫編

古典文庫

無名野草

島津忠夫編

古典文庫

古典文庫第五一八冊

平成二年一月二十日印刷発行　非売品

無名野草
（ななしのぐさ）

編者　島津忠夫
発行者　吉田幸一
印刷者　白橋印刷所

発行所　114
東京都北区西ケ原三ノ三四ノ一二
古典文庫
電話（九一〇）二一七一一七
振替口座東京九・一四五九七番

© KOTEN BUNKO, 1990. Printed in Japan

目次

凡例……三
無名野草 上……五
無名野草 下……一六九
注……三三五
解題……三三七

此为试读,需要完整PDF请访问: www.erton

凡　例

本書は、編者蔵『無名野草』一冊を底本として、原文に忠実に翻刻したものである。但し、翻刻に当たっては、大体次のようにした。

一、漢字仮名の別、仮名づかい、送りがなどは底本のままとしたが、異体の文字などは通行のそれに改めた。

一、原文には朱で濁点・読点を、書名（中央二重）人名（中央）地名（右）官名（左）年号（右二重）に傍線が付されているが、濁点・読点はそれにより、濁点の付けあやまりと思われるもの（ルビの場合を除く）には、（ママ）を付したが、「ね」に濁点などあり得ざる類は省いたところもある。また、濁点の付け落ちと思われるものもあるが、私に付すことはしなかった。書名以下の傍線は省略した。

一、虫損の部分は□で示し、辛うじて判読したものは、右に（　）を付して記した。

一、本文に。印を付し行間書入の部分は、（　）を付して、本文のその位置に記した。

一、和歌の頭には○印があるが省略し、各題ごとに通し番号を入れ、①～⑭とした。底本は続けて記しているが、各題のあとは三行、各和歌のあとは一行あけた。

一、へ（合点）の付されている歌は、番号の右に（点）、へ＼（長点）の付されている歌は、番号の右に（長点）と記した。

一、引用の和歌のあとに、行をかえずに本文を続け、朱の読点が和歌の末尾に付されているものもあるが、読点は残して行をかえた。

一、各丁のうつりには」を付し、［一オ］（一丁表）［二ウ］（二丁裏）のように記した。

一、引用の和歌（近世をのぞく）のあとに、出典を［　］で囲んで記した。

無名野草　上

春月

①

あふぎ見る弥高山の峯よりもほの〴〵出る春の夜の月

かゝる歌は其所にいたり其時にのぞみ事の要ありてよみ侍らんはさも侍りぬべし、今題をかまへて、春月とさしいでたらむに、弥高山其よせもなくしてたとはゞ高円山といひても高間の山といひても、同様の事ならば、又ほの〴〵出る秋のよの月とも、夏

の夜、冬のよの月ともよみたらんに、たがふことやは侍るべき、しからば春月といへる題には、うきて、かひなく侍るべし、

俊成卿女（トシナリノキミノムスメ）春月の哥に（シュンゼイノキョウノ）

ながむれば我身ひとつのあらぬ世に昔（ムカシ）に似（ニ）たる春のよの月

［続後撰・春下］

とよめるも又秋の夜の月ともいはんに、たがはじとやいふべか」

［一オ］らん、これは彼在五郎（カノザイゴラウ）の

月やあらぬ春やむかしのはるならぬわが身ひとつは本（モト）の身にして［古今・恋五・業平］

とよめるに、もとづきたれば、慥（タシカ）に春月にて社侍（コソ）るべけれ、其上、山ノ春月、浦（ウラ）ノ春月などいはん題（ダイ）には、更級姨捨須麻明石等（サラシナヲバステスマアカシトウ）

の、月にたよれる名所をも、とりいでぬべし、只春月といへるばかりの題には、所の名よみいれん事、さして不用の事にこそ侍るめれ、又語にも仰弥高ともいひ、歌にも君をぞ仰ぐ弥高の山ともよみて侍れば、あふぎみるいやたか山といへらんには、其様の意詞を、しもにいひて、光もみつるとか、雲もおよばぬとか、いかさまにも、高明広大の景象こそ有まほしく侍れ、ほの〳〵出るなどは、いとかすかにて、かけあひても見え侍らず、後鳥羽院の御哥」［一ウ］

かすみ行やよひの空の山の端をほの〳〵いづるいざよひの月

［千五百番・二四一左］

岡のべやならの落葉に時雨ふりほの〳〵出る遠山の月［千五百

番・六九四判]

と、よめるやうに、又ほの〴〵出るなどいはゞ、打かすみたる山のは、雲引残る雨の後、影もはつかの在明の空、まだ初秋の初夜の間の月、あるは、同じ所の名にても、小倉の山の夕月夜、津田の細江の浪間の月などいはんこそ、似合侍らめ、あふぎみる弥高山などいへらんは、いとものづよくて、懸合侍らず、和歌はすべて一首の恰合を専要として、たけたかくはたかく、えんにやさしくはやさしくて、本も末も、其躰によみすふべきものにこそ侍れ、もろこしの詩なども、さ侍るにや、又峯よりもの、もの字も、難といふには侍らねど、なきにはをとり侍るべし、高峯よりにても侍れかし」[三オ]

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

②

（長点）かすむとも今幾程の春の夜とおもふ名残は在明の月

光陰のすみやかなるをいためる事、誠に遷流変易のいとまなき世の中、仮合幻化のはかなき身の上まで、思ひしられてあはれもふかく侍るを、春月の当躰眼前の景象をば、まさぐりいはで、向後をかねてまづしたへる事、彼あぶりものをおもひ、夜を時なはんことをおもへるたぐひして大早計ともいふべきにや、されど、ものをいたくめでいつくしまんには、あらかじめわかれをしたひ、かねてよりなごりを思ふこと、人のこゝろのつねにてはべれば、かくも又なじかは□（よ）まず侍らん、歌がらもよろしくこそきこえ侍

れ、又今幾程のとはべらば、春の夜ぞといはんは、をしわたりての、てにをはには侍れど、ぞの字なくても、きこえ侍れば、くるしみ侍らず、祝子内親王（シュクシナイシンワウ）」［二ウ］の歌にも

うしとてもいくほどの世と思ふ〳〵猶其内も物ぞ悲（カナ）しき［風雅・雑下］

とよめり、しるて、ぞの字をいれんとならば、かへりて中飽病（チウハウビヤウ）にやなり侍らん、のの字を、かの字にかへて、今幾程かとはべらば、尤（モトモ）ぞの字に及（ヨヨ）ふべからず、いさゝけの事にて侍れど、稽古（ケイコ）の万一（バンイツ）にもやと、しるし付侍り

③

うすくこく霞わたりて久堅の月も色そふ春の夜半哉

月の色をそふるは、白くさける梅の花、晴たる空の雪の夜などこそさも侍るべけれ、今霞にて、月の色をそへんこと、いかにぞやおぼゆれど、又色といふは、しろき、くろきの五色をのみしも、いふべからず、声のつやあるをも、心のはへあるをも、色といふのみかは、すべて其物の、えむにおかしき景色風情の侍らんをも、色と」[三オ] いはんに、くるしみ侍らじ、さればやむごとなく、徳ある人などの、見はやし、もてなし給へるには、めなれたる花紅葉も、今一きは、めづらかに、うるはしきかたの侍るをも、色をそふといへるにこそ、従三位為子は

尋ても色をそふべき身ならねばとふにつけてや花もやつれん

［玉葉・春下］
法親王覚助（ホウシンワウカクデョ）は

色そへてみるべき君のためとてや我（ワガ）山里の紅葉をもおる［風雅・秋下］

とよめりける、いはんや、月清集（ゲッセイシフ）には

おぼろなる空にあはれをかさぬれば霞も月の光なりけり

玉葉集（ギョクエフ）には

ながむればそこはかとなくかすむ夜の月こそ春の景色（ケシキ）なりけれ

［春上・後宇多院］
新後拾遺（シンゴシフイ）には［三ウ］

てりもせぬならひを春の光にて月に霞のはるゝ夜ぞなき、［春

下・内経〕

祇庵主発句には

かすむ夜やおぼろけならぬ春の月、〔老葉〕

近世烏丸大納言光広卿春月の歌にも

春は猶おぼろけならぬながめ哉かすむを月の光にはして

とよめれば、今の歌もかすみわたりて、月のけしき風情を、もたらせむを、色をそふといはん事、さも侍りなんや、但千五百番歌合には

紅葉ばは染る時雨も有物を何故月の色を添ふらん、〔七三九右・丹後〕

同歌合に

さえわたる光に霜の色そへて野原の虫も月に鳴なり、［六五〇左・公経］

永徳百首には

吹風のかほるのみかは朧夜の月も色そふ軒の梅が枝、［尊道法親王］

続古今には

秋山のよもの草木やしほるらん月は色□ふ嵐なれとも、［秋下・順徳院］

新拾遺には

志賀の泉郎の思ひもいれぬ袖までも秋は色そふ月やみるらん、［秋上・土御門小宰相］

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton